



勝敗よりも大切なこと ～後に何が残るか～

地区総合体育大会が始まり、手に汗を握る熱戦が繰り広げられています。選手・指導者・大会役員の皆さん、猛暑の中お疲れ様です。保護者の皆様の温かい応援も、大きな力になっています。先日の部活動激励会で、ある部の決意表明が心に残りました。

👁️部活動激励会の応援団

最後まで勝ち続けるチームは、たったひとつ。
そのチームも、いつかは敗れるときがくる。
負けた後に、何が残るか？
勝負の世界では、常にこのことが問われる。



勝負の世界は厳しく、常に結果がつきものです。しかし、勝敗はすべてではなく、負けた後に残ったものが「一生の財産」になることも多いものです。

リオデジャネイロ五輪(2016)の男子体操種目で、内村航平選手とウクライナの選手(ベルニャエフ)が、金メダルを競い合った時のことです。勝負は最終種目の鉄棒までもつれ込み、わずか0.099点差の劇的逆転で、内村選手が金メダルを取りました。

試合後、一人の記者が内村選手に意地悪な質問をします。

「あなたは審判から好意的に見られているのでは？」

この質問に真っ向から反論したのは、隣でインタビューを受けていたウクライナの選手でした。

「判定は正しい。今の質問は無駄だ。」

と、その質問を切り捨てたのです。内村選手に敗れたばかりの選手が、自分に勝った選手への敬意を忘れず相手の勝利を素直にたたえる姿は、会場の人々に感動を与えました。

五輪やワールド杯を通して、全力を尽くした両チームが試合後に相手をたたえ合う姿に、私たちは何度も心を打たれてきました。その激闘は国と国との“争い”ではなく、選手と選手が“最高の技と心を競う”場であることに改めて気づかされます。皆さんの総体やコンクールにも同じことが言えるのではないのでしょうか。

地区総体の各部の奮闘を見ながら、ある小説の主人公の台詞が頭をよぎりました。

一生懸命やって勝つことの次にいいことは、
一生懸命やって負けること。(モンゴメリ『赤毛のアン』より)

たとえ負けても、「一生懸命やった」価値が薄れることはありません。中学校の部活動を締めくくる3年生が、勝敗だけにとらわれず、チーム豊中の一員としてどう輝くのか、そして何をつかむのか、見守っています。

